

約束は時を超えて

星空のメモリア・アフターストーリー



ながひろ

NAKAHIRO

イラスト●司田カズヒロ

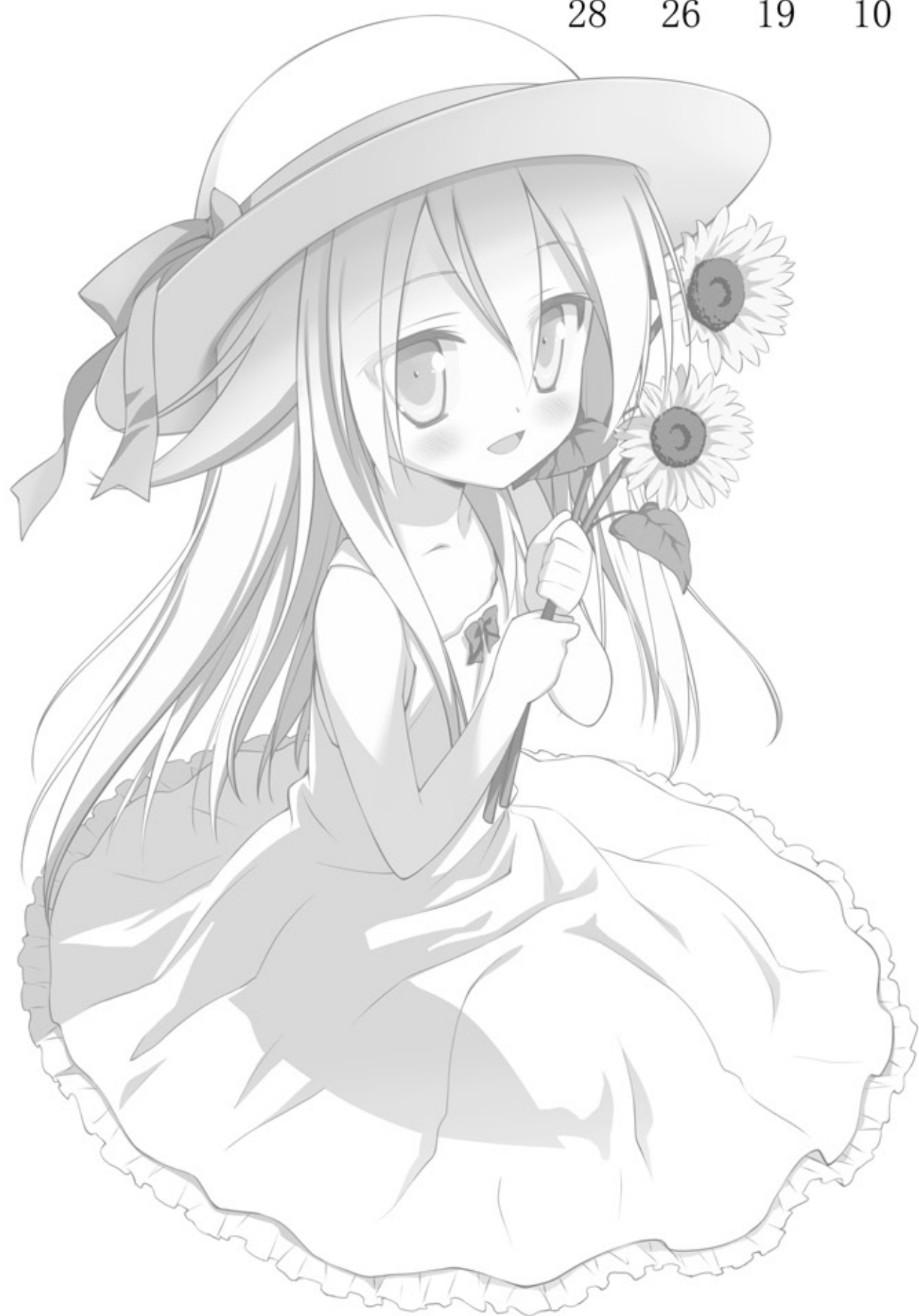
KAZUHIRO SHIDA

約束は時を越えて

星空のメモリア・アフターストーリー

目次

プロローグ	04
第1幕 ヒバリ校の都市伝説	05
第2幕 思い出のオルゴール	10
幕間 天文部の恋物語	19
第3幕 約束は時を超えて	26
エピローグ	28



プロローグ

雪が降っている。

夜空はまだ星が見えているが、天体観測を続けるには難しい天候になりつつある。

「残念だけど、今夜はここまでかな」

部長の南星総一郎が、部員たちを見回した。

今夜はヒバリ校の屋上で、天体観測があった。

天文部の活動だ。

そこに小河坂歌澄もついて来た。歌澄は天文部の部員ではないのだけれど、それをとがめる者は誰もいない。

雪は降り続けている。

今年に入つての、初めての雪。

総一郎も言ったが、今夜はもう、部活を早めに切り上げるしかない。

部員たちは望遠鏡の片付けを始める。歌澄も手伝うことにした。

「……千尋くん？」

世良千尋だけが片付けを始めず、いまだ星空をぼんやりと見上げていた。

「どうかした？」

「いや」

千尋は短く答えるだけで、動こうとしない。

綺麗な横顔だと、歌澄はつい見惚れてしまう。

千尋という名前は女みたいだと周囲は言っていて、天文部員の一人である姫柊万夜花なんかもよくからかっていた。

そして本人も女性のように線が細いから、なおさら中性的な印象がある。

夜空の雪を背景にすると、儚げにも見える。

部員たちは片付けを終え、次々と校舎に戻っていく。

「二人も、早く校舎に入れ。屋上のカギを閉めるから」

顧問の三嶋大河先生が、歌澄と千尋に遠くから声をかけた。

「千尋くん、早く戻ろ？」

「……そうだな」

千尋はやつと歌澄に振り向くと、優しくほほえんだ。

歌澄には、無理に笑ったように見えた。

望遠鏡を部室に運んで、戸締まりをしつかりやつてから校舎をあとにする。ほかの皆は、すでに帰途についていた。

千尋は屋上からずつとぼんやりしていて、どうも行動が遅かった。

この校門前に、今は歌澄と千尋の二人きり。

二人が通っているヒバリ校は、坂の上にある。歌澄の自宅はちょうどその坂のふもとに構えている。

一方、千尋は電車通学だ。駅は、歌澄の家を通り過ぎた先にある。

二人の帰り道は途中まで一緒なのだが、千尋はなかなか歩き出そうとしない。

「千尋くん……電車、大丈夫？ 急がなくていいの？」

このままだと千尋の帰りの電車がなくなってしまう。雲雀ヶ崎は田舎なので、電車の本数が少ないのだ。

歌澄は、千尋の手を引こうかどうか迷った。

なんなら、そのまま手をつないで帰った方がいい。

むしろつなぎたいと思う。

千尋はそういうことにあまり積極的ではないので、歌澄の口から切り出すことだつてある。

（私たち、つきあつてからもう二年以上経つてるけど。なんか初々しいかも）

それは、千尋が恋に奥手だからかもしれない。

自分では奥手じゃないと思っていた歌澄自身も、実は恥ずかしがり屋だったせいかもしれない。

今もやっぱり恥ずかしくて、実際に手をつないだら顔がぼかぼかすると思うけれど、それは冬の寒さも和らげてくれるだろう。

雪は降り続けている――――

「……別れよう」

千尋が先に切り出したせいで、歌澄は口をつぐむしかなかった。

歌澄の手は、千尋の手を握ることができなかった。

彼の綺麗で儚げな顔が、いつしか決意めいたものに変わっていた。

「歌澄。オレたち、別れよう」

この日、歌澄の恋は散った。

第1幕 ヒバリ校の都市伝説

今日は入学式があった。

それと一緒に上級生との対面式も行った。

蒼鈴葉は、たつた今終わったロングホームルームでもマジメに最後まで先生の話を聞いていた。

鈴葉は、この春からヒバリ校の一年生になる。楽しみにしていた鈴葉だから、どんなに退屈な話だつて一言も聞き漏らしたくなかった。

「……すごく肩凝っちゃったけどね」

「朝からそんな緊張してたら、そりゃ凝るでしょ」

友だちの飛鳥火子「かこ」が鈴葉の席に寄ってきて、呆れながら声をかけた。

「……緊張してたように見えたかな」

「見えた。立つてるときも座つてるときも、背筋がぴんとしてたしね」

「そ、そうなんだ」

「いかにも優等生って感じで、鈴葉らしいと思ったよ。あたしなんかもうちよつとで寝そうだったのに」

火子とは前の学校からの友だちだ。

ちよつと人見知りの気がある鈴葉にとつては、彼女の存在が頼もしい。

このヒバリ校でクラスメイトになれたこともそうだし、彼女は鈴葉と違って元気で明るいからだ。

そう。ちよつと、鈴葉が尊敬する小河坂千波のように。

「火子ちゃん、寝不足？」

「違う違う、先生の話が退屈だつて意味。鈴葉つてば相変わらず天然なんだから」

「そ、そうなのかな……」

「退屈じゃなかったのは、オリエンテーションの部活動紹介くらいかな。思ってたより本格的っていうか、迫力があつたっていうか」

「雲雀ヶ崎は娯楽が少ないから、そのぶんヒバリ校は部活動をがんばってるってお姉ちゃんから聞いてたよ」

今ごろは、新入生の勧誘に乗り出している部活も多いだろう。

「鈴葉は、もう入る部活決めてるのよね」

「うん」

「じゃあ、これから部活の見学？」

「ううん。今日は、ちよつとほかに用事があつて」

「そうなんだ？ 天クルに入るの、入学前からあんなに楽しみにしてたのに」

「うん……。だけど、この用事も大切だから」

今日はまだ授業がないため、下校の時間は通常より早い。だから鈴葉はこの

日を逃したくなかった。

「火子ちゃんは？」

「あたしは特に予定ないし、部活の見学するつもり」

「どの部活？」

「オカ研よ」

「そ、そうなんだ……」

鈴葉はなんだか感動した。こんな身近に千波さんのあとを継ぐ人がいたなんて……。

「でも、なんでオカ研？」

「お兄ちゃんが昔、入ってたみたいなんだ。いろいろ話聞いてたせいで、興味出ちゃつて」

「火子ちゃん、お兄さんがいるんだ」

「うん。今は家を出て、兄妹で住んでるんだけど」

「兄妹？ お兄さん以外にもいるってこと？」

「うん。あたしの姉にあたる人。その人とは、あんまり会ったことないんだけどね」
どういふことだろう？

聞いちゃいけないかったことのような気がして、鈴葉は慌てて話題を変える。

「オカ研つて、サークルだよな？」

「だろうね、部活動紹介には出てなかったし。むしろまだ存在してるのかすら怪しいわ」

「それでも、オカ研なんだね」

「うん。なかったら作ればいいだけなんだから」

前向きなところも、やっぱり千波に似ている。

「ひとまず、生徒会にでも聞いてみようかな。オカ研が存続してるのかどうか」

「私も手伝おうか？」

「鈴葉は用事があるんでしょ。あたし一人で充分よ」

「でも……生徒会つて、怖いイメージあるよ。昔は天クルも廃部にさせられそうになったつて、お姉ちゃんから聞いてたから」

「そうなんだ。相手にとつて不足はないわ」

火子は逆に燃えていた。

鈴葉は、そんな友だちが危なっかしいと思うこともあるけれど、やっぱりうらやましいという気持ちのほうが大きかった。

私も、火子ちゃんみたいにもつと強くなりたいな……。

「あたしは、必ずヒバリ校の都市伝説を解き明かす。お兄ちゃんができなかったことをやり遂げてみせるんだから」

火子はそう、鈴葉の前で決意表明するのだった。

火子とは昇降口で別れた。火子は生徒会室に向かい、鈴葉はそのまま下校する。

鈴葉は通学路である夢見坂を下りながら、さっきの火子の決意を思い出す。「ヒバリ校の都市伝説……か」

ヒバリ校には実際、ある都市伝説が生徒の間で語り継がれている。

昔は鈴葉も、千波の兄である小河坂洋に連れられ、夜の校舎に忍び込んで肝試しをしたことがあった。

「結局、都市伝説の真相って、なんだったのかな……」

火子は、それを解き明かしたいと言った。なぜそんなに固執するのかはわからないけれど、火子だったら有言実行するだろう。

「お兄さんができなかったこと……火子ちゃんだったら、きっとできるよ」

鈴葉は道を急ぐことにする。

この時間なら、まだ彼女があそこにいるはずだ。

幼稚園に着いた。

ここでは千波が先生として勤めている。

洋なんかは、先生というよりは園児と一緒に遊んでいるだけだと言って、呆れていたけれど。

一方、洋の妻である夢は、千波は先生に向いていると太鼓判を押していた。

鈴葉もそう思う。だって千波の笑顔は、いつだって周囲を明るくしてくれる。

「千波ちゃん、もつとあそぼー」

「千波ちゃんが鬼ね！」

「なんで千波ばかり追いかける役なのっ」

「そのほうがおもしろいんだもん」

「悪い子はいねがー！」

「あはははっ、逃げろー！」

幼稚園の広場は、千波を中心として賑やかだ。まだ外に立っている鈴葉のところにまで笑い声が届いている。

過去は鈴葉も、その元気に何度救われたかわからない。

（ありがとう、千波さん。私も今は、普通に学校に通えるくらい、元気になることができました）

鈴葉はぺこりと一礼してから、賑やかな広場を横目に建物のほうへと足を運んだ。

「いらっしやい、鈴葉ちゃん」

千波と同じく先生として働いている小河坂夢が、鈴葉を出迎えた。

連絡はしてあったので、待っていてくれたようだ。

「鈴葉ちゃん、遊びに来てくれたんだよね？」

「はい。ご迷惑じゃなければ」

「迷惑なんかないよ、幼稚園はみんなで遊ぶところなんだから」

「それだけじゃないと思いますけど……」

「人は遊ぶためにこの星に生まれ落ちてくるんだよ」

「そ、そうなんでしょうか……」

夢は性格が小悪魔的というか、冗談かどうか判断しづらいことをよく言うので、鈴葉は困ってしまう。

（それとも、私がマジメすぎるのかな……。火子ちゃんにも言われるし）

たまに不安になる鈴葉だ。

「芽愛。鈴葉ちゃんにごあいさつは？」

夢の背中には、小河坂芽愛が隠れていた。

顔を半分だけ出して、鈴葉をじっと見つめている。

夢と芽愛は親娘の関係だが、芽愛は現在、園児としてここに通っているのだ。

「芽愛ちゃん、こんにちは」

「……ふいつ」

鈴葉があいさつすると、芽愛はそっぽを向いてしまう。それから夢の腰に腕を回して、ぎゅっと抱きついた。

芽愛とは、これが初対面ではない。だから芽愛は、鈴葉を怖がっているというよりも、拒絶しているようだった。

そもそも芽愛の場合は、相手が鈴葉に限らず、この幼稚園の園児たちとも仲良くしていない。

鈴葉はそのことを千波から聞いていた。

だから心配になって、ここを訪れたのだ。できたら芽愛と遊んであげたいと思って。

「ごめんね、鈴葉ちゃん」

夢が頭を撫でても、芽愛はぶすつとしたままだ。

「せつかく遊びに来てくれたのに、こんな調子で……」

「い、いえ。恥ずかしがってるだけだよ、芽愛ちゃん？」

「……ちゃん付けしないで。わたしは、大人のお姉さんよ」

その言い回しに、鈴葉は心の奥底がうずいた。

そこは想い出のしまつてある場所。

「うん、そうだね。芽愛ちゃんは大人だもんね」

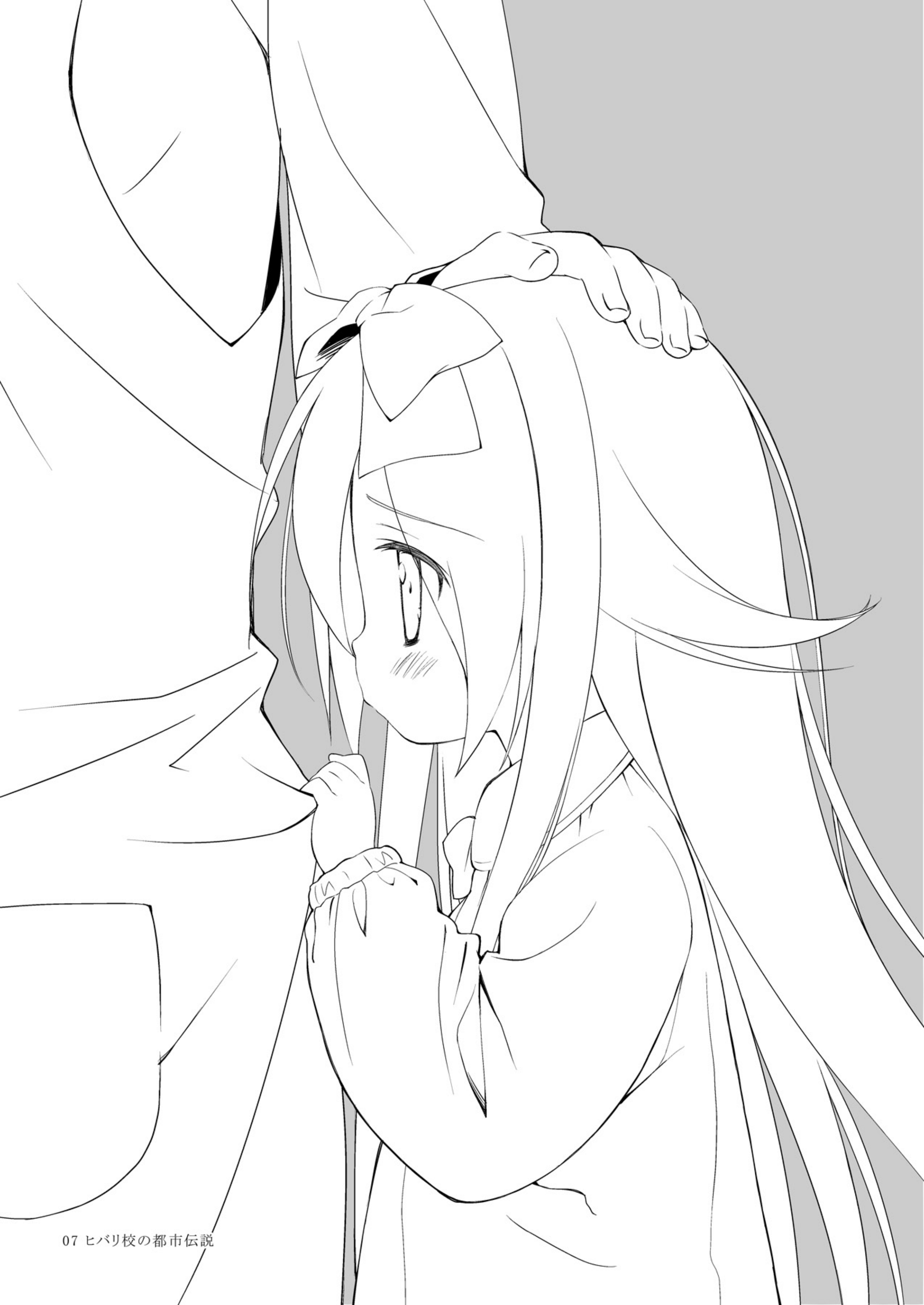
「……ちゃん付け」

「ご、ごめんね。芽愛ちゃん」

「……」

機嫌を取ろうとしても、芽愛は鈴葉を警戒したまま、夢のそばを離れない。ほかの園児たちのところにも行こうとしない。友だちを作ろうとしないのだ。その理由は、鈴葉も知らない。わかるのは、過去の自分とは違うということだけだ。

（私は、身体が弱くてなかなか友だちが作れない時期があったけど……）
だけど、芽愛はそうではない。



母親の夢は昔から体調をくずすことが多かったようだが、幸い芽愛は大丈夫だと聞いている。

この幼稚園で、自分から友だちを作らない芽愛。それを気にしてか、今も夢は頭を撫でてやりながら、複雑な顔になっている。

「芽愛ちゃん。夢先生が、困ってるでしょ？ ほかのみんなと遊ぼう？」

「……子どもの遊びなんか、しない」

「じゃあ、私と遊ぼうか？」

「あなたも子ども」

「そんなことないよ。私、今年からヒバリ校の一年生になったの。もう大人なんだよ」

「……」

「大人の私とは、遊んでくれるよね？」

芽愛は、どうしようか迷うふうに、母親である夢を見上げる。

「鈴葉ちゃんは大人だよ、私よりもずっと」

「そ、そんなことはないですけど……」

慌てる鈴葉だ。

「芽愛、鈴葉ちゃんと遊んでおいで。先生からのお願いだよ」

「……お母さんは、先生じゃない」

「じゃあ、お母さんとしてもお願いするよ」

「……それならいい」

芽愛はしぶしぶと、夢の背中から出てくる。

「芽愛ちゃん、なにしたい？」

「大人の遊びがしたい」

「そ、そういう言葉、あんまり口にしないほうがいいよ？」

「わたし、この子と遊んであげた」

「まだ会話しかしてないよ……」

芽愛は結局また、夢の身体にしがみついた。

（芽愛ちゃん……お母さんのこと、大好きなんだね）

鈴葉はふと、思いついた。もしかして、芽愛ちゃんが友だちを作ろうとしないのって……

「芽愛ちゃん。今夜、肝試ししない？」

鈴葉の急な申し出に、芽愛は瞳をぱちくりした。

「まだ春だし、時季外れだけど。よかったら、私と一緒にどうかな？」

「……それって、大人？」

「うん。大人じゃないとできない遊びだよ」

芽愛の両目が輝いた。食いついてきた。

「あの、夢先生。今夜、芽愛ちゃんをお借りしてもいいですか？」

普通だったら驚くところなのだろうが、夢は鈴葉の意を汲んだのか、

「うん……。芽愛のために、ありがとう」
そう、優しくお礼を言ったのだった。

鈴葉は芽愛と約束を交わしたあと、幼稚園を出た。
陽が落ちたらまた、芽愛を迎えにくつもりだ。家はお隣さんなので、それは簡単だ。

過去、鈴葉は小河坂家の団らんにお邪魔することが多かった。今ではさすがに遠慮しているが、訪問するのは慣れている。

「……あ、電話」

ケータイが鳴っている。相手は火子だった。

火子の話では、現在ヒバリ校にオカ研はないらしい。

だけど都市伝説は、依然として息づいている。事実、聞き込みをしたら情報が手に入ったそう。

「火子ちゃん……もう聞き込みしたの？」

「そうよ。善は急げって言うじゃない」

「先にオカ研作ったほうがいいような……」

「それならもう作った」

「そ、そうなの？」

「うん。生徒会からオカ研はないって聞いたから、その場ですぐに創部の申請したの」

「……もう申請、通ったんだ？」

「ううん、まだ。検討するって言われただけ」

「じゃあまだ、オカ研ってできてないんじゃない？」

「あたしがいるところ、そこがすでにオカ研なのよ！」

千波さんだけじゃなくて、オカ研の部長さんともダブって見えるよ、火子ちゃん……

鈴葉はそう考えてから、閃いた。

火子ちゃんのお兄さんって、ひよつとして……？

「とにかく、聞き込みのおかげでかもしれないことがわかったから、まずはそれを調べてみようと思ってる。それで、鈴葉にも手伝って欲しくて連絡したのよ」

「……手伝い？」

「うん。そっちはもう、用事終わった？」

「まだ終わってないかな……。夜にまた約束したから」

「そっか、残念。まあ鈴葉は天クルに入るんだろうし、オカ研の活動に無理に誘うつもりはないんだけど」

「手伝いつて、今夜なの？」

「うん。ヒバリ校の校舎に忍び込むから」

鈴葉は「え？」と聞き返す。

「肝試しみたいなものよ。昨日の夜にね、音楽室のピアノがひとりで鳴ってるのを聞いた上級生がいるのよ」

「なんだか、どこにでもある怪談に聞こえる。」

「その生徒は生徒会役員で、オカ研のこと尋ねるついでに聞いたんだけどね。昨日は仕事で長引いて、帰りが夜になっちゃったんだって」

役員なんて怖そうな生徒を相手にしても、火子は堂々と聞き込みしている。そういった度胸も、鈴葉が尊敬している部分だ。

「だから今日、同じ時間帯を待って音楽室を調べようと思って。でも鈴葉は用事あるし、あたし一人で肝試しするしかないかあ。かなり寂しいけどね……」

「いいよ、火子ちゃん」

鈴葉が言っていると、今度は火子が「え？」と聞き返す。

「私の用事も、夜の校舎であるんだ。今夜はみんなで肝試しだね」

第2幕 想い出のオルゴール

三嶋大河は天体観測愛好サークル——天クルの部室で、悪戦苦闘していた。放課後に入ってから、この場所を借りてオルゴールの修理を続けていたのだ。このオルゴールは天クルに代々受け継がれていて、今ではシンボルの扱いになっている。

天クルがまだ天文部と呼ばれていた頃に、当時は顧問だった大河が作ったものだ。だから壊れてしまった場合は、大河が修理を受け持つことになる。

「大河くん……なかなか苦勞しているようですね……」

いつからか、大河の傍らにレンが立っている。

この時間ではまだ姿を出すことが難しいため、半透明だ。おかげで守護霊のようにも見える。

「オルゴールの修理は、まだ終わりませんか……」

「そう簡単にはいかないさ。ただのオルゴールじゃないんだから」

それはカレイドオルゴールと呼ばれるもので、一見すると望遠鏡の置物のようだ。

底についているゼンマイを巻いて、円筒のレンズをのぞけば、光の競演を眺めることができる。

ビーズの部分が回転する仕組みになっていて、いわゆる万華鏡が合体したオルゴールなのだ。

「天文部の時代から続いているシンボルだしな、丁寧に直さなきゃならないっていう時間もかかる要因だ」

「夜空に向けて望遠鏡をのぞき込めば、色とりどりの星空が見える……このカレイドオルゴールは、それを模している……シンボルになるのもうなずけます……」

「難儀なことだ。俺は、そんなつもりで作ったわけじゃなかったんだけどな」

大河は、なぜカレイドオルゴールを自作し、この部室に置くことに決めたのか。理由を知っているのは、当時の天文部の仲間たちだけだ。

「このオルゴールが壊れたのは、二回目ですよ……」

「正確には違う、前回のあれはペンダントを入れたせいだからな。今回は普通に古くなったのが原因だ」

レンの命とも呼べるそのペンダントは、今は大河の首に下がっている。

「オルゴールと同じくらい、大切にしてくださいね……。大河くん、朝寝坊したときに、持っていくのを忘れそうになることがあるんですから……」

「ペンダントを身につけてないと、おまえはここに姿を現せなくなるもんな」

「そうです……それが星神「ほしがみ」の性ですから……」

「そんなに俺のそばにいたいのか」

「そ、そういう意味じゃありません……私は、ダメ人間の大河くんをほっとけなだけで……」

「わかつてるよ」

「あ、頭撫でる大河くんは……嫌いです……」

基本、無表情のレンなのだが、こういうときは真っ赤になるのが抑えられない。レンは大河に顔を見られたくなくて、深くうつむいてしまう。

「わ、私……おやすみします……すやすや……」

最後には消えようとするので、大河は慌てて止める。

「待った待った、レン。おまえに手伝って欲しいことがあるんだ」

「私にオルゴールなんて直せませんけど……」

「ほかの用事だ。さっき洋から電話があつてな、頼み事があるとかで」

「そうですか……大河くん、ちゃんと洋さんの父親をやるようになりましたね……」

以前は息子の洋から逃げてばかりだった大河だが、やつと自然な関係になりつつある。

親として、子どもの頼み事を引き受けることもある。

「どうもな、今夜この校舎に忍び込む生徒がいるそうだ。洋はそのことを夢から聞いたらしいんだが」

「洋さん……夢さんとは、仲良くしているようですね……」

「あとな、肝試しは生徒だけじゃなくて、娘も連れていくんだそうだ」

「メアさんですか……私に協力を頼むというのも納得です……カマで送り還せばいいんですね……」

「……そうじゃない。それに芽愛は、メアだった頃の記憶をまだ思い出していないそうだ」

「そうなら最後、私が引導を渡してあげます……」

星神というのはどうしてこう、あまのじゃくなんだろう。大河は呆れるしかない。

「おまえに頼みたいのは、生徒が無茶をしないように見守ることだ。俺のほうも、あとで警備員に説明してくるつもりだけだな」

「生徒が怒られないように取りはからうわけですね……」

「ああ。せつかくの肝試しだ、捕まって終わりじゃ意味がない。あいつだって望んでいないだろうからな」

大河は、暗くなり始めた窓の外を見上げた。

夕焼け空に、一番星が輝いている。

「おまえが広めた都市伝説は、今も後輩たちに受け継がれてるよ……」

大河は、見えない誰かに語りかけるようにつぶやいた。

「なあ、千尋……」

※

陽が落ちてからのこと。

喫茶店ミルキーウェイのドアベルがカランカランと鳴り、蒼衣鈴が姿を見せた。

「いらつしやい、蒼さん」

ウェイトレスの南星明日歩がさつそく出迎える。

「おひさしぶりだね蒼ちゃんつ、再会できる日を待ちわびてたよ蒼ちゃんつ」

千波も元氣いっぱい駆け寄ってくる。こっちもなぜかウェイトレスの格好だ。

「……会うのは、そんなにひさしぶりじゃないと思うけど」

「千波はいつだって蒼ちゃんと一緒にいたいんだよつ、お兄ちゃんが夢さんのそばを離れないのと同じでねつ」

「……私は千波さんと結婚する気はありません。それより、その格好は？ 幼稚園をクビになったとか」

「相変わらず冗談きついよ蒼ちゃんつ、今日は仕事帰りにすぐ寄って明日歩先輩の手伝いしてただけだからねつ」

「千波ちゃん、蒼さんのことが待ちきれなくて、じつとしてられなかったんだよ」

明日歩が苦笑しながら説明した。

「だって蒼ちゃんが一番最後だったからねつ、来ないんじゃないかって心配しちゃったよつ」

千波の言葉は本当だった。この店にはすでに、いつもの面々が集まっていた。衣鈴が加わり、全員集合になったわけだ。

「今日、集まるのが最も難しいのは、蒼さんだと思っていましたけど。来てくれてよかったです」

姫柊こさめがおつとりと、衣鈴にテーブルの席を勧める。

この中では衣鈴だけが、雲雀ヶ崎を出ていて、ほかの街の宇宙科学館で働いている。

ただ、雲雀ヶ崎の宇宙科学館もそろそろ開館の目処が立つと聞いている。そうなったら、衣鈴は可能であればそこに勤め直したいと考えている。

ともあれ今日は、連絡をもらったために急遽帰省したのだ。

「幸か不幸か、仕事が残業にならなかったで。帰ってくることができました」

「平日だものね。わたしたちだって、急に連絡が来てびっくりしたわ」

姫柊こもが呆れ混じりのため息をつく。

姫柊姉妹は、以前までは衣鈴と同じく雲雀ヶ崎を離れて暮らしていた。だが大学卒業を機に帰郷した。

どちらも医学部の課程を修了し、こももは医師として今は隣街の病院で研修を行っている。そしてこさめは看護師として、同じ病院で働いている。

それだけではなく、巫女である諏訪雪菜と一緒に、神社の手伝いをすることもあるようだ。

こももがこのまま医者になるのか、それとも家の神社を継ぐのか。もしくは、大変だろうと両立するのか。

姉さんならきつとできるだろうと、こさめは周囲に話していた。

「蒼さん、飲み物はなにがいい？」

「いえ……お構いなく」

「あたしのおごりだし、遠慮しなくていいんだよ」

それだとますます遠慮してしまうのだが、明日歩の押しが強いことはこれまでのつきあいであっているの、衣鈴はうなずくしかなかった。

「蒼さんが一息ついたら、わたしたちはそろそろ出たほうがいいのかもかもしれません」

「そうね。外も暗くなってるし」

こももとこさめが、そろって窓の外に視線を向ける。

元天クルの面々はなぜここに集っているのか。それぞれ、洋から連絡があったからだった。

もしよかったら、後輩たちの力になって欲しい。急だったその呼びかけにも、断る者はいなかったのだ。

「こちの都合も考えて欲しいものね」

「まったくです。いい迷惑です」

「姉さんと蒼さんは素直じゃないんですから」

「あたしは今から楽しみでたまらないよ」

「千波は天クルのOGじゃないけど毎度のように勝手についていくつもりですつ」

洋と夢は、すでに現地で準備を進めているという。
ミルキーウェイに集った仲間たちは、ひさしぶりのイベントにそれぞれ胸を躍らせていた。

※

夜を待つてから、鈴葉は芽愛を連れて、ヒバリ校の校門前に着いた。

辺りはしんと静まっている。火子はまだ到着していなかった。

「芽愛ちゃん、寒くない？」

「べつに寒くない」

春とはいえ、陽が暮れると気温は一気に下がる。

校舎の明かりが消えているため、薄ら寒くも感じ、鈴葉はつい身震いしてしまう。

「芽愛ちゃん、寒くなったら言ってね」

「寒くないって言った」

「じゃあ……怖くはない？」

「べつに怖くない」

芽愛はこんなときでも素っ気ない。

「……すごいね、芽愛ちゃん。私なんてドキドキしっぱなしなのに」

子どもの頃に肝試しをしたときも、こんな気持ちだった。怖いけど、わくわくするような感じだ。

姉の衣鈴は恐がりなので、肝試しをさらに盛り上げてくれたものだった。

（芽愛ちゃんは、こういうの平気みたい。火子ちゃんもそんな気がするし、私が一番恐がりになるのかな）

もし幽霊が出たら、がんばって悲鳴を上げよう。鈴葉は妙な気合いを入れた。

「お待たせ、鈴葉」

火子が、手を振りながら坂を駆け上ってきた。

元気で明るい彼女が混ざると、気温もなんだか上がった気がする。

「あたしの名前が火子だからって、暖房扱いしないで欲しいわ」

「な、なんで私の考え、わかったの？」

「まあ、なんとなく」

火子は昔から抜群に勘が良い。

「それよりごめん、ちよつと遅れちゃった」

「ううん、火子ちゃん電車通学だし。私たちよりも大変だと思うから」

「……私たち？ ほかに誰がいるんだ」

芽愛は、火子が見えるや否や、鈴葉の背中に隠れてしまった。周囲が暗いこともあって、火子は芽愛の存在に気づいていなかったようだ。

鈴葉は、火子にちゃんと紹介したかったのだが、芽愛は顔を半分だけ出して相手を見つめるだけで、背中から出てこようとしなない。

芽愛ちゃん……ほんとに、メアさんみたい。

「鈴葉、その子は？」

火子が注目すると、芽愛は完全に鈴葉の背中に隠れてしまう。

「彼女は、芽愛ちゃん。私が肝試しに誘ったんだ」

「……こんな小さい子なの？」

「わたしは小さくないわ、大人のお姉さんよ」

芽愛はまた、半分だけ顔を出した。

「芽愛ちゃん、いくつ？」

「……子ども扱い」

芽愛はそっぽを向いて、また背中に隠れようとする。

「かわいい……」

その前に火子に捕まった。

「だ、抱きついちゃダメ……」

芽愛は真っ赤になってじたばたした。

「幽霊が出て宇宙人が襲ってきても、お姉さんのあたしが守ってあげるからね」

「わ、わたしのほうがお姉さんよ」

「かわいい……」

「だ、抱きつくのダメ……苦しい……」

芽愛ちゃんと火子ちゃんが仲良くなってくれて、よかったな。騒がしい二人を、鈴葉は平和に見守っていた。

それから三人は、校舎に忍び込むことにした。

音を立てないよう、気をつけながら歩を進める。

先生も生徒もとくに帰宅しているだろうが、警備員は残っているはずだ。

なのに校門は開いていたし、昇降口の力ギもかかっていなかった。不用心なのは昔からあまり変わっていない。

こういったのんびりした空気は、雲雀ヶ崎の特色の一つだろう。

「廊下とか、真っ暗かと思っただけ……。案外明るいね」

火子がひそひそと声をかける。

「明ると感じるのは、窓から星明かりが差し込んでいるためだ。とはいえ、奥まで見通せるほどの光はない。」

「綺麗っていうか、幻想的っていうか。もつとおどろおどろしてたほうが宇宙人も好みそうなのに」

「……火子ちゃんは、幽霊よりも宇宙人を見つけないの？」

「うん。あたしは、音楽室のピアノは宇宙人が弾いてるとにらんでるから。きつとピアノの音が、UFOと連絡を取るための信号なのよ」

「連絡取るなら、電話とかで十分な気が……」

「それだと傍受される恐れがあるじゃない」

「ピアノのほうに誰かに聞かれるんじゃないかな……。実際、聞いた生徒がいるんだよね」

「もしかしたら、わざと聞かせたのかもしれないわ。あたしたちをおびき寄せたために」

「なんでおびき寄せる必要があるのかな……」

「目的は人さらいでしょ。宇宙人って言ったらそれしかないじゃん」

それは宇宙人さんに失礼なんじゃないかな……。

「……火子ちゃんって、お兄さんいるんだよね。その人って、飛鳥未来さん？」

「そうだけ……」

「やっぱ。宇宙人に拘るところがそっくりだ。」

「お兄ちゃんのこと、知ってたんだ？」

「昔に、ちよつとだけ。洋さんのお友だちだったから」

「洋さん？」

「この子のお父さんだよ」

芽愛は、鈴葉の背中に隠れるようにして歩いている。

夜の校舎に怖がっているのかどうか、表情からは判断できない。

「芽愛ちゃん、私と手、つながるか」

「芽愛ちゃん、私と手、つながるか」

「……どうして？」

「鈴葉は、芽愛ちゃんが怖がつてると悪いからって思ったんじゃない？」

火子がそう説明した。

「……わたしは、怖くなんてない」

芽愛はそう言うだろうと、鈴葉なら簡単に予想がつく。

「火子ちゃん、そうじゃないよ。私が怖いから、芽愛ちゃんと手をつなぎたいって思ったんだよ」

鈴葉は、芽愛の頭を優しく撫でる。

芽愛はもじもじしたあと、ふいつと横を向く。

「かわいい……」

「だ、抱きつくのダメ……」

「……火子ちゃん、騒がしくしたら警備員に見つかるかもしれないよ」

それから鈴葉は、芽愛の小さな手をそと取る。

「芽愛ちゃん。手、つないでもいいかな？」

「……あなたが怖いなら、つないでもいい」

「うん。ありがとね」

芽愛はすぐに、鈴葉の手をぎゅつと握った。

そこからは、小さな震えが伝わってくる。

（芽愛ちゃん……本当は、怖かったんだよね）

だけどこれまで、表には出さないようにに必死だった。普段から口数の少ない芽愛だけど、今夜はさらに顕著だった。

この肝試しが、楽しい遊びになればいい。過去の自分がそうだったように。

「鈴葉って、子どもの扱いに慣れてるのね」

火子が感心していた。

（ううん、違うよ。私は、芽愛ちゃんと仲良くなりたいたけなんだよ……）

芽愛はなぜ、幼稚園で友だちを作らないのか。

いつまでも夢にべつたりなのか。

鈴葉は、そんな芽愛を昔の自分に重ねてしまう。

友だちを作らずに、姉の衣鈴にべつたりだった自分。

身体が弱い自分を、お姉ちゃんは守ろうと必死になっていた。

だからお姉ちゃんに、よけいな苦勞を背負わせた。

自分のせいで、お姉ちゃんもまた、ヒバリ校で友だちを作ろうとしなかった……。

鈴葉、火子、芽愛の三人は、まずは一階を見て回ることにした。

それから二階、三階と上に登っていくルートに決める。

問題の音楽室は二階に位置するので、そこで終わる可能性もあるのだけれど。もし音楽室でなにも見つけられなければ、それ以上の階も調べたいというの

が火子の意見だった。

「校門もそうだったけど、教室にもカギかかってないんだ。こりゃ探索しがいがあるなあ」

火子は嬉々として教室の扉を開けては、興味深げに中をのぞき込んでいる。

「まだ入学したばかりだから、自分の教室くらいしか把握してなかったけど。これならほかの全部の場所ものぞけそうね」

「さすがに宿直室とかはやめたほうがいいんじゃないかな……」

「そうね、警備員と鉢合わせになりそうだし」

「あと、火子ちゃん。扉開けるときは静かにね」

「わかってるって」

鈴葉のそばにいる芽愛は、扉が開く音がしてはびくつとなつて、火子が声を上げてもびくつとする。

今では、手をつないでいるというよりも、鈴葉の腕に抱きついて格好だ。

「芽愛ちゃん、怖かったら言つてね？」

「こ、怖くなんかない」

「私は、ちよつと怖いよ」

「……そうなの？」

「うん。だから芽愛ちゃんも、怖がつたつていいんだよ」

「こ、怖くないもん……バカバカ……」

なにか話していたほうが芽愛の気もまぎれると思って、こんなふうにはよく芽愛に声をかけていた。

ひとつひとつの教室を調べるだけで、結構な時間を費やした。三人はやつと一階を踏破する。

「今のところは収獲なしか……。それじゃ、今度は二階ね」

「音楽室がある階だよ」

「うん。時間的にも、そろそろピアノの音が鳴つてもおかしくないわ」

火子は興奮を隠さずに階段を登っていく。

あとに続こうとした鈴葉だが、芽愛が立ち止まったために動けなかった。

「芽愛ちゃん、疲れちゃった？」

「そ、そんなことない……」

疲れているのは確かだろう。

このヒバリ校は坂の上に建っている。そこを登るだけでも、芽愛の体力では辛かったはずだ。

「火子ちゃん、先に行つていいよ」

「あれ、二人は？」

「私たち、ちよつと疲れちゃったから。少し休んだら、追いかけるよ」

「わかった。先に音楽室、調べてくるわ」

「うん。朗報を期待してるよ」

火子は一人で二階に向かつていった。

「……わたし、疲れてないのに」

芽愛がスネている。

「うん。だけど私が疲れたから、休みたかったんだよ」

「……そうなの？」

「うん。ごめんね、芽愛ちゃんまでつきあわせちゃって」

「べ、べつにいい……」

二人は階段に座ることにした。芽愛はまだ、鈴葉の手を離そうとしない。鈴葉も優しく握りかえた。

騒がしい火子がいなくなると、静寂がのしかかってくる。芽愛が怖がらないよう、鈴葉は話しかけることにする。

「……私はね、芽愛ちゃんのお父さんに感謝してるんだよ」

芽愛は、まばたきをして鈴葉を見上げる。

「洋さんは、私のお姉ちゃんのお父さんになってくれたんだ。それまでお姉ちゃん、この雲雀ヶ崎で友だちを作ろうとしてなかったから」

静かな校舎に、鈴葉のやわらかい声が響いている。

「お姉ちゃんが友だちを作ろうとしなかったのは、悲しい過去があったから……。そしてその過去から逃げるように、妹の私の世話ばかり一生懸命になってたの」

芽愛は、鈴葉の語りを黙って聞いている。

「だけどね、それを変えてくれたのが、あなたのお父さんだったんだ」

「……」

「お姉ちゃんはずっと、あなたのお父さんが好きだったんだ……」

鈴葉は息をついた。おしまいの合図。

「……あなたのお姉さんは、わたしのお父さんが好きなの？」

芽愛がおそろおそろ聞いた。

「そうだったのかもって話。昔の話だよ。洋さんには、夢さんがいるじゃない」

「あなたのお姉さんは、わたしのお父さんを、お母さんに奪われたって思ってるの？」

鈴葉は驚いた。そんなふうに受け取られるとは思ひもなかったからだ。

「違うよ、芽愛ちゃん。お姉ちゃんは、絶対にそんなこと思っていない」

「……どうして？」

「だってお姉ちゃんは、洋さんが幸せであることが一番だって、思ってるから」

「……」

「だからね、芽愛ちゃん。あなたのお母さんも、あなたが幸せであることが一番だって、思ってる」

鈴葉は、芽愛の頭を撫でながら言った。

「きつと、こう思ってるんだよ。あなたには、お母さんのそばだけじゃなくて、ほかの子どもたちとも一緒に笑っていて欲しいって……」

芽愛はもう、鈴葉に頭を撫でられても逃げなかった。それはもしかしたら、あくまで優しく接する鈴葉を、母親に重ねたからかもしれない。

芽愛はうつむいて、ぽつぽつと語り出した。

「……わたしは、ほかの子たちとなんか、遊びたくない。それよりも、お母さんのそばにいたい」

「……」

「お母さんを、ほかの子たちに取られたくない……」

鈴葉は今、はつきりと芽愛の心情を理解することができた。

（だから芽愛ちゃんはさっきも、洋さんを取られたのかって聞いたんだね……）

姉の衣鈴が、夢に嫉妬していると勘違いしたのは、自分自身がそうだったからなのだろう。

幼稚園に勤めている夢は、芽愛以外の園児たちとも区別なく接している。芽愛

一人ばかり構ってはいられない。

だから芽愛は寂しくなった。

友だちを作らず、夢にべつたりになってしまった。

大好きなお母さんを、誰にも渡したくなかった……。

「芽愛ちゃん……私、芽愛ちゃんともっと仲良くなりたいな」

芽愛から返事はなかった。うつむいたままだった。

鈴葉は、肝試しを続けたいと思った。

今日、芽愛と一緒に肝試しをしようと思ったとき、夢から聞いた言葉を思い出した。

ヒバリ校の肝試しには、ゴールがある――

「芽愛ちゃん、まだ疲れてる？」

「……疲れてない」

「それなら、私が背負っていいのかな？」

「つ、疲れてないって言った」

「肩車でもいいよ」

「……」

「どっちがいい？」

「……肩車」

鈴葉はうなずいて、体勢を整える。

「やり方、わかる？」

「……うん。お父さんに、よくしてもらってるから」

「そっか」

「お父さんの肩車……好きだから……」

洋みたいにくまぐまできないかもしれないが、鈴葉は芽愛を肩にまたがらせ、どうにか立ち上がることに成功した。

（私だって、成長してるんだよ。昔よりもずっと、体力ついたんだから）

肩車をしたまま、二人は階段を登っていく。その先のゴールを目指して。

※

火子は二階に上がってすぐ、奥の教室に明かりがついていることに気がついた。「あそこが……音楽室ってことかな」

聞き込みでは、部屋に明かりがついていたなんて情報は得ていない。ひとりでピアノが鳴るのだったら、教室は無人のはずで、どうせ真つ暗なのだ。火子も普通に考えていた。

「……じゃあ、違うのかな。警備員が見回りしてるとか」

もしくは、忘れ物でも取りに来た生徒がいるとか。

なにしろ、軽々しく調べることはできない。

「どうしようかな……」

火子が迷っていると、遠くから音が聞こえた。

小さな音。耳をすますと、なにかの曲だとわかった。

ピアノの音色かどうかは、判断がつかなかった。すぐに止んでしまったためだ。

だが一瞬でも、いくら小さな音でもたしかに聞こえた。

火子は廊下の奥を見据える。窓から差し込んだ星明かり——その先、薄闇に

まぎれた教室。おそらく音楽室。

やはりいるのだ、誰かが。

もしくは、なにかが。

「……………」

火子は自然と息を殺す。

もう迷う必要はなかった。相手が何者かは、現場を押さえれば判明するのだから。

音を立てないよう、急ぎ足で向かう。

（鈴葉には言ったけど。ヒバリ校の都市伝説は、あたしが必ず解き明かしてみせる……）

火子はどうしても知りたかった。

昔は兄も調べていた。だけど真相を暴いたかどうかはわかっていない。

兄は決して、火子に話そうとしなかった。都市伝説を解き明かしてやると火

子の前で何度も宣言していたくせに、その結果を教えようとしなかったのだ。

なぜなのか、火子は気になっている。

だからこのヒバリ校で、才力研として活動することに決めたのだ。

（お兄ちゃんが都市伝説を追っていた理由は、知っている……。あの人を探した

めだったのよね……）

あの人というのは、飛鳥伊麻のことだ。兄の未来にとっては妹にあたり、火子

にとっては姉にあたる。

そして兄は、最後には伊麻を見つけたのだ。それは、都市伝説の真相を知ったということだろうか。ついに答えを見つけたのだろうか。答えを見つけたから、あの人を追って、一緒に暮らすことにしたのだろうか……。（……あれ？）

明かりがついた部屋に近づくと、自分の勘違いが判明した。（音楽室じゃなかったのね……）

そこは視聴覚室だ。暗くて見えにくいのが、プレートにはそう書いてある。

鈴葉から聞いた話では、天クルが部室として使っている教室だ。

その隣の最も奥まった教室が、音楽室だった。最初は遠目だったし、間違うのも無理はなかった。

（ひとりでに鳴るピアノのことを教えてくれた役員も、音楽室と視聴覚室を間違

つたつてわけね……）

また、聞こえる。物悲しい曲が響いてきた。

場所はやはり視聴覚室からだ。

この曲が懐かしいと感じるのは、記憶にあるからではなく、音色のせいだろう。

これはピアノというよりも、オルゴールの旋律だ。

（中に誰かいるのは、確定でしょうね……）

火子は、目の前のスライド式のドアに手をかける。

（慎重に、慎重に……）

これから視聴覚室の中を、そつと覗くつもりだ。

相手が警備員だったら、すぐに逃げよう。

自分と同じ生徒だったら、特に問題はないだろう。

じゃあ、それ以外の誰かだったら？

「……………」

物悲しいオルゴールの調べは依然、続いている。

火子としては、謎の相手が幽霊だとうれしい。宇宙人だとなおうれしい。

そういった不思議現象に近づけば、兄や姉にも近づけると思うから。

この、もやもやした気持ちを持ちを払拭できると思うから。

都市伝説を解明することそれが叶うと、火子は信じて疑わない。

（行こう。迷ってたって、前には進めないんだから）

火子はいつだって、そうやって前向きに生きてきた。

だから今回だって、迷わずにドアを開ける。

それとほぼ同時だった。

教室の明かりが、突然消えた。

視界が闇に閉ざされる。

火子は悲鳴を上げそうになった。

15 思い出のオルゴール

※

「大変です……大変です……」

大河が視聴覚室——天クルの部室でオルゴールの修理を続けていると、肝試しの生徒を見守っていたレンが戻ってきた。

「あまり大変そうな声に聞こえないが、どうした」

「生徒がこちらに向かっています……オルゴールの音に気づいたようです……」

「そうか。じゃあ、俺の作業は中断だな」

「すぐに逃げないといけません……」

「わかつてる」

大河はもともと、そのつもりだった。誰かがここを訪れるなら、その前に姿を消す。

オルゴールを鳴らしたのは、修理のためというのもあるが、肝試しの雰囲気を作るといふ理由もあった。

「せつかくだし、楽しんで欲しいからな」

「肝試しとしては、時季外れでしょうけど……」

「だとしても、ゴールを迎えることはできるさ」

大河は素早く片付けを終える。

「廊下からかすかに足音が聞こえるな……。でも、一人のようだが」

「はい……私が確認したのも、一人です……」

「別行動を取ってるのか？ 鈴葉ちゃんが、芽愛を一人にするとは思えないが……」

「いえ……ここに向かっているのは、私の知らない生徒です……」

「二人以外にも、肝試しをしている生徒がいるのか」

「どうなんでしょう……メアさんたちとは違って、単に忘れ物を取りに来た生徒かもしれないけど……」

「どちらにしろ、俺たちはここを出ようか」

「そうですね……急がないと、見つかる可能性があります……」

「教師がいることがバレたら、肝試しとしては興ざめだろうしな」

レンは姿を隠し、廊下の様子を探りにいく。その間に、大河は逃げ出す準備を整える。

「生徒が今、扉の前に着きました……」

姿を消したまま戻ってきたレンが、大河に耳打ちする。

その生徒が扉を開けてしまう前に、大河は教室の明かりを落とした。

今、相手は驚いているに違いない。

その隙に大河とレンは、もう片方の扉から廊下に出るつもりだった。

実際、その相手は、急に明かりが消えたことで驚いた。

あまりのタイミングに、普通ならパニックに陥り、次の行動を起こせなくなる。

廊下に人影が現われたことにも気づかないだろう。

だが、その女子生徒は普通ではなかった。

大河は、教室から逃げおおせることができなかった。

彼女はすぐに次の行動を起こし、反対側の扉に回り込んだのだ。

「誰ですか、あなた」

逆に大河のほうに驚いて、目の前の彼女に答えることができなかった。

「噂の宇宙人エーエージェントですか？」

そんな噂は初耳だったので、その問いにももちろん、大河は答えられなかった。

暗闇の中でも、彼女のよく動く大きな瞳が、大河を捕らえて離さない。

大河は観念して、教室の明かりを再びつけた。

「なにやってるんですか……大河くん……」

レンが呆れている。姿はまだ隠しているが、大河にだけ聞こえる声でささやいた。

「こんなにあつさり見つかってしまつて……」

「いや……逃げ切れろと思つたんだが……」

「ダメ人間……クスクス……」

「……その笑いはやめろ」

「あなたも、誰ですか」

見えていないはずのレンにまで、彼女は声をかけてきた。

「そんな大きなカマミたいなの持つて……死神みたいに見えるんですけど……」

「……キミ、レンのことが見えるのか」

「レン……？ その子どもたちの名前ですか」

「私は子どもではありません……キミみたいな子どもよりも、ずっとずっとお姉さんです……」

レンも観念したのか、隠れることをやめた。その姿が大河にも見えるようになる。

「おかしいですね……常人には見つからないレベルで隠れていたはずなんです……」

「だったら彼女は、常人じゃないってことかもな」

「霊能力が高いのかもしれない……星天宮の巫女のように……」

「星天宮……」

彼女はそう繰り返した。星天宮という名の神社を知っているらしい。

大河は、この少女の正体が気になった。それは向こうも同じのようだった。

三人は、ひとまず互いに自己紹介を交わした。

※

火子は、視聴覚室で遭遇した謎の二人組を怪しんでいた。

男のほうは三嶋大河と言って、この学校の教師らしい。火子はまだ入学したばかりなので、顔を知らないのも無理はなかった。

それでもう一人、幼い女の子——レンのほうはいまいち要領を得なかった。相手

もどう説明していいのか悩んでいるようだった。

「それでキミは、肝試しをしていたわけだ」

「……はい。校舎に忍び込んだわけだし、あたしのこと怒りますか？」

「いや。それよりも、ほかの生徒は見なかったか」

「鈴葉のことですか？」

「そうか、キミは鈴葉ちゃんの友だちだったんだな」

「はあ……。みんなで肝試ししてたんですけど」

「芽愛はどうした？」

「鈴葉のそばにいますよ」

三嶋先生は安堵していた。心配していたようだ。

「先生……鈴葉の知りあいですか？」

「そう言っているのかもな」

「勝手に肝試ししてる鈴葉を、連れ戻しに来たとか？」

「そうじゃない。もともとキミたちの邪魔をするつもりはなかったんだ」

先生だったら注意してもよさそうなのに。火子はいまいち納得できない。

「キミは、なぜ肝試しに参加したんだ？」

「あたしは……ヒバリ校の都市伝説を調べたくて」

「なるほど」

三嶋先生は、傍らにたたずむレンと顔を見合わせる。

「それは、ますます応援したくなるな」

「仲間たちもよろこびそうですしね……」

火子は首をかしげるしかない。

「……先生は、都市伝説を知ってるんですか？」

「まあ、ヒバリ校に伝わってるわけだからな。噂くらいは耳にしてる」

火子もまた、ある程度の内容は知っている。

ヒバリ校の都市伝説は、男女の悲恋物語であること。

女は何者かに想い出を奪われ、恋人だった男と別れることになった。

それはおそらく、過去に基づいた話なのだと、兄からも聞いている。

だが、それ以上のことはなにも知らない。

「じゃあ先生は、この都市伝説が真実だと思いますか？」

「……そうだな」

三嶋先生は、どう答えようか迷ってから、

「俺にとつては、真実かどうかは些細なことだ。だからキミのように解明したいとは思わない」

「……興味がないってことですか？」

「そうじゃない。この都市伝説を調べるのは、俺の世代じゃなくて、キミのよう

な若い世代であるべきなんだ」

火子には、よく意味がつかめない。

だけど直感した、先生は都市伝説の全容を知っているのではないかと。

「生徒たちが肝試しをするために、夜の校舎を訪れる。そこに意味があるんだ。レンもそう思わないか」

「そうですね……きつとそれが、千尋くんの望んだことでしょうか……」

「その千尋つて人が、都市伝説に出てくる男女のどちらかなんですか？」

「……おっと、しゃべりすぎたかな」

三嶋先生は口を閉ざしてしまふ。

「先生、なにか知ってるなら教えてくれませんか」

「……」

「そもそもなんで、こんな都市伝説がヒバリ校に広まっているのか……。それも疑問なんですけど」

「その答えなら、すでに出ているじゃないか」

「……え？」

「都市伝説は、こうして後代に受け継がれる。肝試しと称して夜の校舎に忍び込むんだ。屋上をゴールにしてな」

「……」

「この都市伝説を広めた誰かは、それが目的だった」

「……生徒を、夜の屋上に向かわせるため？」

「ああ、そうだ」

「なんの意味があるんですか？」

「キミも、屋上に登ればわかるさ」

「……」

「納得いかないか」

「……あたしが知りたいのは、真相だけです」

火子は、都市伝説を解明したい。だが強いて言えば、気になっていたのは男女の

正体ではなく、女の記憶を奪ったという存在のほうだった。

そいつは一体、何者なのか？

（記憶を奪った誰か……そしてあの人も、同じように記憶を奪われていた……）

火子の姉である伊麻もまた、家族の想い出をなくしてしまったと聞いている。

「先生、教えてください……。女の記憶を奪ったのは、誰なんですか？」

「……」

「それは、星神つてやつですか？」

火子は歯がゆく思っている。

星神については、お兄ちゃんは知っているみたいだったけど、なにも話してくれないし。

お姉ちゃんと話すのは、ちよつと怖いし……。

「……さっきも思ったが、キミは、星天宮の巫女なのか？」

「あたしは違います。姉が、そうだっただけです」

「キミの姉の名前、聞いていいかな」
「伊麻です」

「……そうか。納得したよ」

三嶋先生は大きく息をついた。

「キミは、星神を恨んでいるということか？」

「……わかりません」

「キミの姉は、星神を恨んでいるのか？」

「それも、知りたいことの一つです」

姉の伊麻が行方不明になったとき、火子はまだ生まれたばかりだった。

火子は、姉のことを覚えていない。姉との思い出なんか一つもなかった。

だから、急に目の前に現れて、お姉ちゃんだと言われても実感が湧かなかった。

「姉つて言っても……あたしは、どんなふうに顔を合わせればいいのか、いまだにわからないですけど」

だからまだ、伊麻をお姉ちゃんと呼んだこともない……。

「……キミは、俺と同じだな。俺も過去はそうだった。息子に対して、どう接すればいいのかわからなかったよ」

「親近感ですか……大河くん……」

「さあな」

三嶋先生は自嘲的に笑う。

「キミには話そうか。俺の知ってる範囲でいいならな」

「……都市伝説の真相を？」

「真相と言うよりも、裏側と言ったほうがいいかもしれないがな」

「話してくれるのは、あたしに親近感を持ったから？」

「そうじゃないさ。キミはしつこそうだから、さっさと話さないと俺の帰宅が遅くなる」

そして三嶋先生は、ゼンマイを巻いてオルゴールを鳴らした。
物悲しい調べに乗って、男女の恋物語が語られる――――

幕間 天文部の恋物語

ヒバリ校に今なお語り継がれる都市伝説は、ひとつの恋が元になっている。ある男女——小河坂歌澄という少女と、その恋人である世良千尋が紡いだ物語。

中学校を卒業すると、式が終わったあとに歌澄は彼から第二ボタンを受け取った。

これから二人が入学するヒバリ校で、恋人としてつきあつて欲しい。歌澄からそう告白した。

彼の第二ボタンはその証。千尋は歌澄の告白を受け入れたのだ。

二人は、ヒバリ校でもクラスメイトになることができた。だが、部活は別々になつてしまう。

千尋は天文部に入部した。一方、歌澄は吹奏楽部を選んでいく。

千尋のピアノの腕前を知っていた歌澄は、てっきり吹奏楽部に入るとばかり思っていたので、尋ねもせず決めてしまったのが運の尽き。

当てが外れてしまったわけだ。

だから歌澄は吹奏楽部を辞めて天文部に入り直そうと考えたのだが、千尋には反対された。

歌澄が吹奏楽部に入っていれば、音楽室に気軽に顔を出せる。音楽が好きで、作曲が趣味だった千尋にとって、それはなによりありがたい。

だったらなぜ天文部に入部したのか尋ねた歌澄に、千尋はただ星空も好きだからと答えるだけだった。

千尋は雲雀ヶ崎の変わらない星空に羨望を抱いていた。

永遠に近い星空に憧れていた。

その理由は彼自身の薄命にあるのだが、それを歌澄や、ほかの仲間たちが知るのはずとあとのことだった。

歌澄と千尋が二年生に上がった春、教師が一人、ヒバリ校に赴任した。

それが、三嶋大河先生だった。

彼は学歴を買われて天文部の顧問となつたのだが、そのわりに吹奏楽部の歌澄のことをよく気にかけていた。

そこには理由がある。歌澄が中学生だった頃に大河は偶然、彼女と出会った。そして一目惚れをした。

あがり症の大河が、生徒の前に立たなければならぬ教師になつたのも、歌澄への恋がキッカケだった。

歌澄もまた、大河のことを気にかけていた。

妹の詩乃は、授業で黒板ばかり向いているおもしろい先生がいると、歌澄か

らよく聞かされていた。

そんなふうに関心がない先生だけれど、気がつくともそばには不思議な少女が寄り添っていて、彼を助けているのだという。

詩乃がその少女——レンと出会つたのは、歌澄と千尋が三年生に上がった年。

詩乃がヒバリ校に入学し、初めて天文部の天体観測に参加したときだった。

少女は一見すると死神で、手持ちの大きな鎌で人にとってのまつろわぬものを刈ることができるといふらしい。

まつろわぬものとはなんなのか、部活の先輩だった万夜花に教わつた詩乃だったが、当時は意味を理解できなかった。

レンの正体についてもよくわからなかった。だけどそれは問題ではなく、部員は誰もがレンを仲間だと思っていた。

レンのことは、天文部しか知らない秘密。例外は千尋の恋人だった歌澄くらい。だから当然、レンの不思議な力を千尋は知っていた。

いつからだろう、千尋がその決意を胸に秘めるようになったのは。

なぜ仲間の誰もが気づけなかったのだろう。

仲が良かった二人を近くで見えて、お似合いだなあと羨ましく思うくらいで、詩乃もまたそんなことを思いつきもしなかった。

その年、雪がちらつき始めた初冬。

千尋は歌澄に別れを告げた。

※

今夜は、今年最後の天体観測日。天文部の活動としても最終日になるだろう。

この前、初雪は降つたけれど、まだ積もってはいない。屋上は使えるし、運良く天気も晴れた。

雲雀ヶ崎の冬を考えれば、この日を逃すわけにはいかない。

「物静かだった秋と比べて、明るい星が多いんですね」

小河坂詩乃は、満天の星空を見上げている。オリオン座を筆頭とする冬の星座が、今夜は一段と輝いていた。

「そうだね。ほかの四季と比べても、冬は一等星の数が多い季節なんだ」

南星総一郎が部長らしく解説した。

「それに冬って、寒いのは難点だけど、空気が澄んでいて星見には絶好なのよね」

姫柊万夜花が、総一郎の言葉を補足した。

「部活には不真面目だったキミも、やっと天文部員らしいことを言えるようになったんだね」

総一郎が茶化すと、さっそく万夜花の蹴りが飛んだ。

「足癖が悪いのはずっと変わらないね……」

「今のはただのツツコミでしょ」

「だったら手加減くらいして欲しいな……」

「手加減したわよ。男のクセに情けないわね」

「キミの物差しで計らないでくれるかな、僕は人類なんだ」

また万夜花の蹴りが飛んだ。

「私だって人類よ、失礼なやつね。もっと蹴られたい？」

「……そんなだから、学校で問題児扱いされてるんじゃないかな」

「そんな扱いされてないわよ、ちよつと成績が悪くて素行を注意されるくらいで」

「間違つたよ、キミはクラッシャーって呼ばれるほうが多かったね」

「……あんたがそんなふうにグチグチ言うから、私の蹴りが終わらないでしょ」

騒がしい部員たちとは少し離れて、世良千尋が立っている。会話には参加せず、星空をぼんやりと見上げていた。

詩乃は気になつて、千尋のそばに寄つた。だけど千尋はこちらを一瞥するだけで、すぐに視線を頭上に戻した。

詩乃は千尋の視線を追つた。するとそこに、ひとときわ輝く星を見つけた。

「あの星……すごく明るいですね。真つ白に光つてて」

「そうだね。あれは、おおいぬ座のシリウスだ」

千尋の声が聞けて、詩乃はホッとした。

「シリウスは、全天で最も明るい星って言われてるんだ」

姉さんみたいな星だな、と詩乃は思った。歌澄はいつだって明るくて元気だから。

「有名な星だし、キミも知ってると思うけどね」

詩乃は恥ずかしくなつた。たしかにシリウスくらいは知っているが、副部長の彼や部長の総一郎に比べたら詳しいだなんてとても言えない。

（万夜花先輩よりは、詳しいかもしれないけど……）

もう天文部に所属して半年以上になるが、星座の知識は一般人とさほど変わっていない。

詩乃はそれよりも、部活の空気が好きだった。今夜のように、仲間みんなで活動するという行為そのものに意義を感じていた。

詩乃にとつての天文部は、この冬の星空と同じで、明るく賑やかな空間だ。

たぶん万夜花も同じ気持ちなのだろう。家の神社が星天宮という名前でも、万夜花自身は星が好きということはないさそうだった。

そもそも部活動自体、科学的な理論を学ぶよりも、まったりと観測を楽しむ意味合いが強い。

だから詩乃はこの部に入部したと言ってもいい。

（世良先輩が気になつたっていうのもあるけど……）

姉の歌澄とつきあっている千尋を初めて見たとき、なんて綺麗な人なんだろうと思つた。

儂げな美しさでも言つたらいいのか。姉とは対照的な先輩だった。そんな彼が天文部に所属しているというのも、姉を通じて知つた。だから詩乃はその部を見学した。

千尋とまともに会話を交わしたのはその日が初めてだ。繊細なオルゴールのような声だと思つた。詩乃は惹かれたように入部を即決した。

以来、詩乃は部活でよく千尋に話しかけるようになった。部の中では歌澄の次に、詩乃が千尋のそばにいる時間が長いかもしれない。

今夜も、それは同じかもしれない。

詩乃はしばらく千尋の隣で、明るくて賑やかな星空を見上げていた。冬の星座は、望遠鏡を覗かなくてもはつきりと瞳に映ってくれる。

シリウスだけじゃない、冬の星空そのものが姉さんのようだと思つた。

「……冬の星空は、ちよつとまぶしすぎるかな。だからオレはほかの季節の星空と比べたら、あまり好きになれないのかもしれない」

千尋が独り言のようにつぶやいた。

ちよつど歌澄のことを考えていた詩乃は、不安になつた。

今夜、この場に、歌澄だけが来ていない。

歌澄は天文部ではないが、いつも同行しているのに。

千尋のそばには自分以上に、歌澄がいるのが普通なのに。

なのに歌澄は部活動を欠席した。ほかの仲間は不思議に思っていた。

詩乃は欠席の理由を聞かれたが、答えられなかった。詩乃自身も知らないのだ。千尋もまた、皆に知らないと言っていた。

（でも……本当に、そうなのかな）

もしかしたら、千尋はウソをついたのかもしれない。

千尋だけが、歌澄の欠席を不思議に思っていないようだったから。

「おまえたち、そろそろ時間だ。片付けを始めよう」

顧問の大河が屋上にやって来て、皆に告げた。

千尋だけがほかの部員たちと違って動かずに、あまり好きじゃないと言つた星空をぼんやりと見上げていた。

天体観測会が終わると、詩乃はすぐに帰宅した。

それから歌澄を探した。リビングにいなかったので、部屋を訪れることにした。

「どうかした、詩乃？　こんな時間に」

歌澄はバジャマ姿で出迎えた。頭にタオルを巻いている。お風呂上がりのようだ。

「姉さん……今日、部活休んだよね」

天文部が夜に活動するときは、自宅が近い部員はいったん帰宅することがほとんどだ。詩乃も大抵はそうしていた。

だが千尋は電車通学なので、活動の時間まで学校に残っている。そして歌澄は、放課後は千尋と一緒に過ごすことが多い。

だからてつきり、今夜もそうだろうと思っていた。だが、部活に現れたのは千尋一人だった。

「姉さん、どこ行つてたの？ 家には帰ってきてなかったのに……」
「ちよつとね」

歌澄は頭のタオルを外して、ベッドにぽんと放り投げた。

「海に向かつて叫びたい気分だったから」

「……なにそれ」

「釣りでもしたい気分だったから」

雲雀ヶ崎には観光地として有名な運河があり、さらにその先を進むと港に出る。

歌澄は、詩乃が部活で家を出るまでそこにいたようだ。

「まあ、海釣りなんかしたことないけどね。なにが楽しいのかよくわかんないし、どうせなら泳ぐほうが好きかな。今だと凍えそうだけど」

歌澄は言動に突飛なところがあるので、真に受けない。詩乃はもう慣れっこだ。

「姉さん、今夜の天体観測会って今年最後の部活動だったんだよ？」

「そろそろ雪が積もるだろうし、そうでしょうね」

「わかつてるなら、なんで……」

「私はもともと天文部員じゃないし。部活に出なかったからって文句言う人はいないでしょ」

「世良先輩も、そうなの？」

「……」

「先輩も、姉さんが休むことになにも言わなかったの？」

「……千尋くんは関係ない。今日は一緒だったわけじゃないもの」

詩乃は合点がいった。

天体観測会を行う今日、歌澄は一人になりたかったのだ。港は人気が少ないし、打つてつけの場所だ。

「姉さん。世良先輩と、なにかあったの？」

「……なんでそう思うの？」

「姉さんもそうだけど、世良先輩も様子が変だったから。先週の天体観測会のときから……」

「そっか」

歌澄は明るく笑った。

「千尋くんも、そうなんだ。ちゃんと気にかけてくれてるんだ。うれしいな」

態度は明るい、空元気のように見える。妹なのだから、それくらい詩乃にもわかる。

「世良先輩とケンカでもしたの？ だったら、早く仲直りして欲しいな……」

「なんで？」

「なんでって……。二人って、お似合いだって思ってるから。うらやましいくらい

……」

「うらやましかったの？」

「……う、うん」

詩乃は赤面してしまう。歌澄は、今度は小悪魔めいた笑みを浮かべた。

「それって、恋に恋してるってやつ？」

「そ、そんなんじゃないけど……」

「じゃあ、千尋くんのが好きなの？」

詩乃は真っ赤になってうつむくだけで、なにも言えなくなってしまう。

「詩乃。だったら、チャンスかもよ」

「……え？」

「私、千尋くんにフラれたからね」

詩乃は驚いた。赤かった顔から、熱がすうっと引いていった。

「先週の天体観測会が終わったあと、千尋くんに切り出されたの。別れようって」

「……」

「理由を聞いても教えてくれなくてさ。まあ、私に原因あるんだろうけど。私ってわがままだったり強引だったりするから、周りに迷惑かけてばかりだし。だから結局、別れるしかなかったやつ」

詩乃は後悔した。浅はかに、問い詰めるようなことをしてしまったのだ。姉さんを傷つけたに違いない。

だけど歌澄は笑っていた。普段どおりの明るい口調で言葉を続けた。

「でもね。私は千尋くんのことを諦めたくない。だって、千尋くんのこと好きだもの。別れを切り出されても、この気持ちには変わってないんだもの。この好きって気持ちは増えることがあっても、減ることがないんだもの。」

「だけど、そうだからって、しつこくつきまとうこともしたくない。わがままで強引なところが嫌われた理由なら、それを直したい。だから部活にも出なかったの。千尋くんと距離を置くことにしたのよ」

「……世良先輩のことが、好きなの？」

「好きだからこそ、よ。私はこれ以上、千尋くんに迷惑をかけたくない。千尋くんが幸せだったら、私も幸せなんだから。まあ、カッコつけすぎかもしれないけど」

歌澄は最後まで明るかった。そう、無理に装っていた。

だから詩乃は、どうしても知りたくなった。なぜ千尋は、歌澄と別れることにしたのか。

なぜ姉さんを悲しませるようなことをするのか……。

その後も歌澄は、千尋とは一定の距離を置いていたようだった。

クラスメイトとしては普通に接しているようだが、必要以上に近づくことは決してしない。

あくまで友だちとしての距離感を保っている。詩乃の目には、逆にそれが歌澄を

傷つけているように見えた。

別れを告げられた相手と何事もないように会話するなんて、どれだけ辛いだろう。男子とつきあったことのない詩乃だけど、想像くらいは容易かった。

そんな姉への思いやりが、詩乃を行動に駆り立てた。千尋に直接会って、どういふことなのか聞いたしたい。

今年の部活はもう終わりなので、三年生の教室で捕まえるしかない。上級生の階に緊張しつつも、詩乃は千尋を呼んでもらうことに成功した。

「キミが訪ねてくるなんて初めてじゃないか。天文部の活動は、しばらくないよ？」

「ぶ、部活のことじゃないんです……」

「ほかの用？」

「は、はい……」

「三年の階が落ち着かないようなら、場所を変えようか」

千尋は、周りのことによく気が回る。天文部でだって、部長の総一郎を陰ながらサポートしている。乱暴者の万夜花の扱いだってうまくこなしている。

そんな彼が、姉を傷つけるなんてやっぱり信じられない。詩乃はますます疑問に思う。

二人で歩いて、人気のない階段の踊り場に着いた。詩乃は改まって口を開いた。

「先輩……どうして、姉さんと別れたんですか？」

「……それが用件か」

「は、はい」

「歌澄には、驚かされた。オレが一方的にフッタわけだし、てっきり怒って口もきかなくなると思っていたのに。それどころか笑顔で接してくるんだ。気まずいだろうに、つきあってたことなんか忘れたように振る舞って、あくまで友だちとしてね。本当に、驚かされたよ……」

「……それが姉さんですから」

「そうだね。オレが思っていた以上に——うらやましいくらいに、彼女は生きることの積極的だ」

（生きることに積極的……）

その妙な言い回しが、詩乃には印象的だった。

「あの……先輩は、姉さんが嫌いになったんですか？」

「そうじゃないよ」

「……姉さんがわがままだから、嫌いになったんじゃないんですか？」

「なんでそう思うのか知らないけど、歌澄の積極性に惹かれてオレは好きになったんだ。嫌いになるわけがない」

「じ、じゃあ……どうして……」

「別れることにした理由は、話せない。キミだけじゃない、ほかの皆にも話すつもりはない。悪いね」

事実、千尋は歌澄にも告げなかった。なにか事情があるのだろうか？

「もう、いいかな。休み時間が終わりそうだ。キミも早く自分の教室に戻ったほうがいい」

「……先輩は、姉さんのことがまだ好きですか？」

千尋は初めて、言葉を詰まらせた。

「姉さんは、先輩のことが好きのままです。この好きはずっと変わらないって言ったんです。先輩も、同じですか？」

「……キミには、関係のないことだ」

その言葉で、今度は詩乃が口をつぐむしかなかった。

「キミが納得できないのも無理はないか。オレは、歌澄を傷つけてしまったんだから。謝るよ……すまない」

頭を下げられて、詩乃は狼狽した。だから千尋が自分の教室に戻っていつても、追うことができなかった。

その夜。

「詩乃。今日、私の教室に来たでしょ」

自宅のリビングで、歌澄がそう詩乃に問いかけた。

「……見たの？」

「そりや、私と千尋くんは同じクラスだもの。詩乃がなんで訪ねたのかも、なんとなくわかるし」

詩乃が歌澄の空元気に気づけるように、歌澄も詩乃のことによく気がつく。姉妹の間で隠し事は難しい。

「あまり千尋くんを困らせないようにね。これは私の問題なんだし、首突っ込むのは禁止」

歌澄はおどけて言ったが、やはり空元気が詩乃にはわかつてしまう。

「……姉さんは、それでいいの？」

「なにが？」

「世良先輩、姉さんが嫌いになったわけじゃないって言ってたから……」

「そうなんだ」

「そうなんだって……それだけ？」

「千尋くんが別れたくなったのは事実なんだもの。やっぱり私の問題よ」

「姉さんじゃなくて、世良先輩のほうに原因があったとしても？」

「同じことよ。千尋くんのほうになにか事情があったとして、千尋くんは私に話さなかった。だったらやっぱり、私にだって原因があるわ。千尋くんにとつての私という存在が、その程度だったってことなんだもの」

詩乃は、二人はやっぱりお似合いで、似た者同士だと理解した。

だつてどちらも、一人で抱え込んでいるから。

誰かに頼ろうとしないから……。

そしてヒバリ校は、間もなく終業式を迎えた。

明日から冬休みということで、詩乃が帰り支度をして教室を出ると、意外な人物が廊下で待っていた。

「……詩乃。ちょっといいか」

相手は三嶋大河先生だった。

彼は一年生の授業を受け持っていない。だから詩乃はよけいに驚いた。

「歌澄と千尋のことなんだけどな……。二人は一体、どうしたんだ？」

三嶋先生は常日頃から、歌澄と千尋を気にかけていた。天文部の顧問だからという理由だけでは収まらないくらいに。

詩乃は三嶋先生に、これまでのことをすべて話した。

二人が別れたことは、先生も、部活仲間たちもすでにそれとなく知っていたようだった。

だが、別れた理由は誰も知らない。

おそらく千尋本人以外には、知る者はいないのだ。

「……先生も、やっぱり理由は知らないんですよね」

「……」

三嶋先生は難しい顔のまま、黙ってしまう。

「先生？」

「……ああ。悪かったな、妙なことを聞いて」

三嶋先生はそれだけ言って立ち去った。詩乃は首をかしげるしかなかった。

年が変わって、新学期が始まった。歌澄と千尋の関係は変わっていない。ただのクラスメイトのまま、友だちのまま、時間だけが過ぎていく。

それでも歌澄は諦めていない。辛さに耐えかね、夜に泣くこともあった。詩乃はそれを何度も見かけている。詩乃は胸が詰まる思いだった。

もう、見ていられない。耐えられない。誰か、姉さんを楽にして欲しい。詩乃はいっしょに願うようになっていた。

きつと、千尋もそれだけを願っていた。

卒業式を控えたある日。

千尋はレンに頼んで、歌澄の記憶を奪った。

歌澄の思い出から、自分の姿を完全に消し去った。

歌澄が、諦めてくれるように。

これ以上、傷つかないように。

楽になってくれるように……。

そのために千尋は、歌澄が守ろうとした恋を、最初からなかったことにした。

※

三嶋先生は、恋物語を語り終えた。

火子は不思議に思っていた。

今の話が、ヒバリ校に伝わる都市伝説……？

そこには、目の前にいる先生とレンも登場していた。二人は当事者なのだ。

「……なぜですか？ なぜ世良先輩は、彼女の思い出を奪ったりなんかしたんですか？」

「あいつは、病気だったんだ」

「……」

「俺は教師の立場から、千尋が病を患っていることは知っていた。だが、詳しい症状までは知らなかった。学校どころか、病院ですら断定ができない病気だったようだな……。電磁波のアレルギーに近いそうなんだが、それが命に関わる病気だったなんて考えもしていなかった。あいつがもうすぐ死ぬなんて、誰も想像できなかったんだ」

その言葉には大きな後悔の念を感じ取れる。

「あいつは、歌澄の前からもうすぐいなくなると知っていた。だからその前に、自分から別れを告げた。それでも歌澄は諦めなかった。そして千尋は、歌澄の記憶を消し去ることにした……」

傍らのレンが、そつと瞳を伏せた。

「歌澄さんが、悲しまないように……。悲しい別れにならないように……。幸せのまま、恋を終わらせられるように……」

レンの言葉にもまた、やりきれない感情が込められていた。二人にとって辛い過去なのは明らかだった。

それでもなお、彼らは都市伝説の裏側を火子に教えてくれた。だから思った。二人は、火子に伝えたいなにかがあるのではないかと。

「この都市伝説の男女はな、自分の思い出に正直だった。迷っていても後悔しても、たとえその行為が間違っていたとしても、二人は懸命に恋をした。幸せな恋を、決して諦めなかったんだ」

なぜなら、と三嶋先生は続けて、

「歌澄と千尋は再会を果たして、子どもをもうけたんだからな」

「……」

「きつと、キミの兄と姉だって同じだろう。どちらも諦めなかったから、再会を果たすことができた。そして共に暮らすことができたんだ」

彼は、火子の兄と姉を知っているようだった。

（今の言葉が、あたしに伝えたかったこと……？）

自分の思い出に正直に。迷っていても後悔しても、例えその行為が間違っていたとしても、懸命に。

その先の幸せを、決して諦めないように……。

オルゴールの音色が、火子の胸にいつまでも響いていた。

※

火子は、部室を去っていった。

肝試しを再開することにしたようだ。それを見届けてから、レンが大河にささやきかけた。

「なぜ……続きを教えなかったんですか……」

「続き？」

「はい……この都市伝説には、続きがあるじゃないですか……。七夕伝説と同じで……」

「二人が再会できたことは、教えたじゃないか」

「大切なことを伝え忘れています……。七夕伝説では、かささが架け橋となりました……。都市伝説では、大河くんが架け橋となったんです……」

「……」

「飛鳥火子——あの子の架け橋は、いったい誰になるんでしょうね……」

「……さあな」

「都市伝説の裏側を話すことで……大河くんが、それになろうとしたんじゃないんですか……？」

「さすがに考えすぎだ」

オルゴールの音がやんだ。

大河が作ったこのオルゴールは、いつしか天文部のシンボルになっていた。

流れる旋律は、千尋が作曲したものだ。

学生時代から作曲が趣味だったそうだ。幼少の頃からピアノを習っていた影響らしい。

なのに千尋は吹奏楽部には入らず、天文部を選んだ。

大河にはその気持ちかわかる気がする。

大河もまた、星に魅せられた一人だから。

「大河くんは……まだ自分を責め続けているんですか……？」

大河がオルゴールを作ったのは、千尋の死を悼む意味があった。

その後に歌澄の死を知らされて、一時はこのオルゴールにレンの隕石を忍ばせることもあったのだ。

「後悔があるのは、当然だ。俺は、人前に出るのが苦手なのに教師にまでなったからな。そうまでして、千尋から歌澄を奪ったんだ」

「それは違うって、何度も言ってるじゃないですか……」

レンは思い巡らせるように、ゆっくりと語り始める。

「キミは、結局は身を引きました……。千尋くんの命があとわずかと知って、歌澄さんに会わせようって決意したんですから……」

だから、私が二人の恋を引き裂いたのに、最後には二人は再び恋に落ちた……。千尋くんが亡くなると、キミは歌澄さんを案じたのに、歌澄さんは一緒にはないと頑なに拒んだ……。歌澄さんは、たしかにキミを愛していたのに……。

私は残酷なことをしました……。千尋くんの頼みとはいえ、出過ぎた真似をしたんだと思います……。恋は、出会いから始まりますから……。歌澄さんが、キミと千尋くん、どちらと先に会ったか……。どちらの選択肢を先に選んだか……。それだけの違いでしかなかったんです……。

歌澄さんは千尋くんと最初に出会ったから、彼と恋に落ち……。歌澄さんが千尋くんを忘れ、キミのそばにいるようになると、今度はキミと恋に落ちていた……。だからすべてが終わってから、歌澄さんは両方の選択肢を選ばないことに決めた……。自分だけで子供たちを育てることに決めた……。それが、歌澄さんの選んだ生き方だった……。

大河は、力なく笑った。

レンも自分と同じく、いまだに後悔を続けている。自分たちは似たもの同士なのだと思いついた。

どちらも、ダメ人間だ。いや、レンはダメ宇宙人になるのか。

「これまで、ありがとうな」

「あ、頭撫でないでください……」

「言っておくが、そのカマで刈るんじゃないぞ。この罪は、俺が背負っていくんだからな」

「違います……」

大河に頭を撫でられながら、レンは赤くなった顔を背けて言った。

「この罪は、これから、二人で一緒に背負っていくんです……。だから私たちは……ずっとずっと、一緒なんです……」

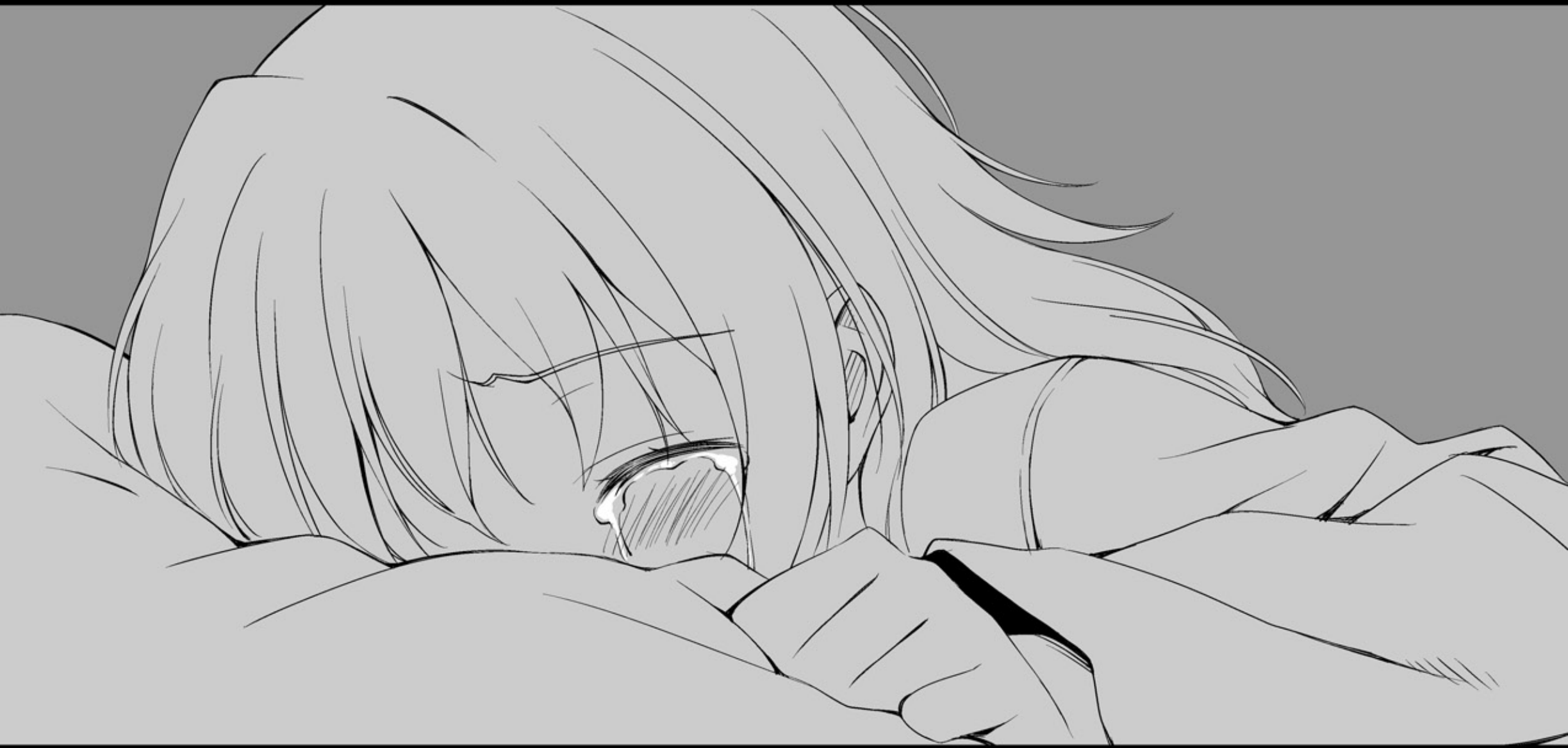
レンの真っ赤な顔は、なんだか幸せそうだった。

大河とレンは、天クルの部室をあとにする。

火子とは違い、屋上に向かうつもりはない。

この肝試しは、後代のためのものなのだから。

都市伝説に真相があるとしたら、それは天文部の仲間たちが、雲雀ヶ崎の星空を好きだったということだけだ。



第3幕 約束は時を超えて

鈴葉は、芽愛に肩車をしながら階段を登っている。

途中、休みを入れながら。ゆっくりとゆっくりと。

二階や三階、四階に着いたときは、廊下を簡単に見回した。

だが、火子はいないようだった。だから火子を探して、鈴葉は階段を登り続けた。

芽愛からはもう、震えを感じない。肩車が功を奏したのか、今は肝試しを怖がっていないようだった。

「……大丈夫？」

芽愛が頭上から、ふいに聞いた。

「なにが？」

「肩車……大変じゃないかなって……」

「心配してくれたの？」

「……そ、そうじゃない」

「ありがとね」

「ち、違うって言った……」

「芽愛ちゃん、私は平気だよ。こう見えて、体力あるんだから」

鈴葉は強がってみせた。芽愛は体重が軽いとはいえ、肩車で階段を登るのは思いのほか辛かった。

だけでもう、目的地はすぐそこだ。だったら最後まで肩車をしてあげたい。

芽愛も怖がらず、安心できるのだから。

鈴葉は、屋上を目指している。

これまで火子と出会わなかったし、廊下にもいないようだったから、そこしかないと考えていた。

肝試しを始める際、ルートは下の階から順に見ていくというものだった。そうするとやつぱり、ラストは最上階のさらに上、屋上になる。

（そこがきつと、肝試しのゴールなんだよね）

二人はついに、屋上に続く扉の前にたどり着いた。

鈴葉は一度、芽愛を降ろした。そうしないと扉を開けるのが難しいからだ。体力的に限界というのもあった。芽愛に平気だと言った手前、そんなことは告げられないのだけれど。

（あ、あれ……？）

芽愛を降ろした途端、鈴葉の身体がふらついた。

いつからだろう、顔に熱を感じる。

これは、過去には頻繁に起こったことだ。鈴葉は疲労がたまると熱を出してしまう子どもだった。

体力……ついたと思ってたのにな……。

「ど、どうしたの……？」

辛そうに座り込んだ鈴葉を見て、芽愛がびっくりして寄り添った。

「大丈夫……ちよつと疲れただけ……」

「汗、すごいよ……顔色、悪いよ……」

「大丈夫だから……」

「だ、大丈夫じゃないっ」

芽愛は声を荒げて、ずいっと迫った。

「お母さんみたいに、無理しちゃダメ……バカバカ……」

芽愛の声がしぼんでいく。

「お母さんもとときどき、こんな感じになるから……。わたし、すごく心配になるから……」

「芽愛ちゃん……」

「しゃべっちゃダメ。安静にしないと、カマで刺す……」

「……芽愛ちゃん、カマなんか持つてるの？」

「持つてないけど……どこかにある気がする……」

鈴葉は、熱で歪んできた視界の中で、今はもう懐かしいメアの姿を見た気がした。

鈴葉は、床の上で横になった。芽愛がそうしろと言ったから従った。

「……ごめんね、芽愛ちゃん。ちよつとはしゃぎすぎちゃったみたい」

「いいから、寝てないとダメ」

そのとき、鈴葉がケータイを落とした。横になった拍子に、ポケットに入れていたものがこぼれたようだ。

芽愛も気づいて、それを拾った。

「これ使って、お父さんに連絡する……。お母さんのときも、お父さんがいつも看病してくれるし……」

芽愛ちゃん、ケータイ使えるのかな……？ 鈴葉はぼんやりとそんなことを考えた。

芽愛はたどたどしく操作しようとする。洋に連絡されると、周囲によけいな心配をかけてしまう。鈴葉は芽愛を止めようとした。

「えっ……これ……」

芽愛が、呆然とつぶやいた。ケータイの操作を忘れ、液晶画面に釘付けになっている。

「芽愛ちゃん、どうかした？」

「ここに……わたしがいる……」

芽愛が見ていたのは、待受画像だった。

そこには、幼い頃の鈴葉と、大きなカマを持った死神が映っている。

場所は坂の上の展望台。二人が寄り添って立っている。

過去、千波がカメラで撮影し、鈴葉に贈ったものだった。

今なお色褪せずに、鈴葉の宝物になっている。

鈴葉は、これまでずっと言いたかったこの言葉を、自然と口にすることができた。「芽愛ちゃん……。私たち、友だちになろう」

鈴葉は思い出を手繰るように、芽愛に手を伸ばした。

「ずっと、待ってたんだよ。メアさんと出会って……。そして、別れることになったあの日から、ずっと。あなたとまた、こうして友だちになれる日を……」

鈴葉は、芽愛の小さな身体を抱き寄せた。

芽愛もまた、鈴葉の熱っぽい身体にぎゅっと抱きついた。

「あったかい……。それに、懐かしい……」

芽愛は、鈴葉の胸の中でうなずいた。

「わたしも……。あなたと友だちになりたい。そう、約束した気がするから……」

「ありがとう……。芽愛ちゃん」

ありがとう、メアさん。

メアさんは、この雲雀ヶ崎で、私の初めての友だちになってくれた。

そして、メアさんだけじゃない……。

洋さんは、この雲雀ヶ崎で、お姉ちゃんの初めての友だちになってくれた。

だから私は、洋さんの子どものあなたとも、友だちになりたかったんだよ……。

鈴葉は、立ち上がった。改めて約束を交わしたことで、芽愛から元氣をもらった気がしていた。

「や、休んでないとダメ……」

芽愛はまだ心配そうだ。

「うん……。私も、無理はしないよ。だけど、休むのはここじゃなくてもできるからね」

「……?」

「行こう、芽愛ちゃん。ゴールはもう、目の前だよ」

鈴葉は、芽愛に手を差し出した。芽愛もまた、鈴葉の手をゆっくりと握る。

二人は手をつないで、屋上に足を踏み入れた。

※

「待ってたよ、鈴葉ちゃん」

そうして小河坂洋は、彼女の到来を出迎えた。

夜空に広がる壮大な星々と共に。

屋上では、仲間たちの天体観測会が始まっている。

明日歩と衣鈴が自前の望遠鏡を用意してくれたし、こももとかさめも組み立てを手伝った。

鈴葉よりも先に着いていた火子もまた、雲雀ヶ崎の星空を一心に見上げていた。

「ここが、ゴール……」

鈴葉は、まぶしさに瞳を細めていた。ここは校舎の中よりもずっと明るくて、賑やかな場所だろう。

「そうだよ鈴葉ちゃん。この雲雀ヶ崎の星空が、ヒバリ校に代々伝わる都市伝説の真相なんだよ」

千波が、オカ研のOGらしく元気に説明した。

ヒバリ校の都市伝説は、千波の父親である世良千尋が流したものだ。その理由は今となっては本人にしかわからない。

だが、洋は察することができる。千尋と歌澄の恋は、洋と夢の恋にも通じるところがあるのだから。

千尋はきつと、雲雀ヶ崎の星空が好きだった。

だからヒバリ校の生徒たちに、肝試しとしてでもいいから校舎の屋上に登って欲しかった。

そして、この星空を見上げて欲しかった。

ヒバリ校は高台に建っている。星見をするには、展望台に勝るとも劣らないスポットなのだ。

「鈴葉ちゃん、顔色悪いよ? 肝試し、疲れちゃった? 千波が看病してあげるね」

「きやつ……。ち、千波さん、一人で歩けますから……」

鈴葉は、千波に抱っこされながら連れられていった。千波はあれでも幼稚園の先生なので、簡単な看護くらいはできるのだ。

「芽愛も、ここまでがんばったな」

洋が頭を撫でると、芽愛はもじもじしてから、やつぱり顔を背けてしまう。

「芽愛。肝試し、どうだった?」

夢が聞いても、

「……ふいつ」

芽愛はこんな態度しか取れないけれど。

「そっか。鈴葉ちゃんと遊べて、楽しかったんだね」

「そ、そんなこと……。言っていない……」

芽愛は真っ赤になりながら、鈴葉から借りているケータイを眺めた。

洋はその液晶画面に気がついて、鈴葉にますます感謝した。

思えば自分たちを支えてくれた人は、たくさんいた。

天クルのみんなはもちろんだけれど。

過去の天文部——マスター、万夜花さん、詩乃さんに。

父さんと母さん、それにレン、千尋さん。

そして最後の恩人が、鈴葉ちゃんだった。

それはきつと、次代の天クルにもつながっている。

「鈴葉ちゃん。芽愛と友だちになってくれて、ありがとう」

夜空から降る星明かりが、この屋上を照らしている。

今夜もまた、雲雀ヶ崎に新たな光を分け与えている。

「こんばんは、総一郎先輩」

ミルキーウェイのドアベルをカランカランと鳴らし、詩乃は店に入った。

「詩乃じゃないか。こんな遅い時間に、どうしたんだい」

マスターは顔を上げると、読んでいた夕刊をカウンターの脇にどけた。

「家のみんなが出かけているので、寂しくなつて来てしまいました」

「はは、そうか。明日歩も出かけたけど、ヒバリ校で天体観測をやっているんだよね。キミも加わればよかったじゃないか」

「いえ、私みたいなおばあちゃんが混ざつてもしょうがありません」

「キミはいつまで経つても変わらないよ。お姉さんならまだしも、おばあちゃんになんか間違つても見えないさ」

「なんだか口説いてるようなセリフね」

詩乃の後ろから、万夜花も姿を現した。

「まさか詩乃と再婚でもする気？」

「……そういう意味じゃない。というか、キミも来たのか」

総一郎は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「なんで私にはそんな態度なのよ」

「キミには苦労させられているからね。過去はもちろん、今だって」

「いい大人なんだし、今はべつに迷惑かけてないでしょ」

「過去のことは否定しないんだね」

「あんたまた蹴られたいの？」

「ご免こうむるよ。オーダーは？」

「コーヒーで」

「私も、それをお願いします」

詩乃と万夜花が椅子に座ったとき、カウンターのの上に置いてあったそれに気づいた。

「これは……オルゴールですか？」

詩乃は、両手でそのオルゴールを丁寧に持ち上げる。

「カレイドオルゴールのようですけど……」

「まさか、天文部のシンボルになつてたつてやつ？」

「万夜花も興味深そうにのぞき込む。」

「キミたちが来るちよつと前に、修理が終わつたとかで、三嶋先生から渡されたんだよ」

総一郎は手際よくコーヒーを煎れると、二人の前にカップを置いた。

「……先生もここに来たんですね」

「ああ。夜になるまで、学校でオルゴールの修理をしていたらしい」

「それでなんで、ここに置いていくんだか。自分で天クルの部員に渡せばいいのに」

万夜花が呆れている。

「べつに、あがり症だから自分で渡せないわけじゃないだろう。きつと僕たちに見て欲しかったんじゃないかな」

「天体観測をやらない代わりに、万華鏡を楽しめつて？」

「たぶんね」

「逆に、先生から子ども扱いされてるみたいで腹立つわ」

「現に僕は、先生の教え子だろう」

「それに……先生は、この曲も聴いて欲しかったんじゃないでしょうか」

詩乃はオルゴールの底についているゼンマイを巻く。

すると、懐かしい調べが店内を満たした。

千尋が作曲した、題名のない音楽。

総一郎も万夜花も、瞳を閉じてその音色に浸った。

詩乃は、胸の奥底にしまつていた想い出を刺激される。

それは学生時代の想い出。ヒバリ校に入学し、どの部活に入ろうか悩んでいたときのことだった。

まずは姉の歌澄が入部している吹奏楽部の見学をしようと音楽室を訪れると、千尋がこの曲を弾いていた。

詩乃は魅せられたのかもしれない。

彼が吹奏楽部の部員ではなく天文部に入っているのだと知り、だから詩乃は追いかけた。

詩乃は、天文部に入部した。

歌澄は吹奏楽部の部員で、彼は天文部の部員。だけど彼は、歌澄とつきあ

つていたから吹奏楽部によく顔を出していた。

詩乃は気になつて彼に聞いたのだ。

なぜ姉さんと同じ吹奏楽部に入らなかつたのかと。

そんなにピアノが上手なのに。作曲までできるのに。

すると彼は、こう答えたのだ。

オレは、雲雀ヶ崎の星空が好きだから、と。

天文部が紡いだ物語は、天クルに受け継がれ。

そしてまた、雲雀ヶ崎の星空の下で、後輩たちに受け継がれてゆく。

あとがき

文 なかひろ

おひさしぶりです。なかひろです。

今回のお話は、星メモEHのその後です。

鈴葉がヒバリ校に入学したり、伊麻の妹が出てきたり、おなじみの面々もそれぞれ仕事をがんばっていたり。親世代のみんなも相変わらずミルキーウェイでだべっていたり（笑）。

過去の天文部から始まり、ゲーム本編で語られた天クル、そして最後に未来の天クル……といった感じでしようか。

こんなに深く星メモに関わらせていただけたのは、フアンの皆さんの応援があればこそだと思います。ありがとうございます！星メモだけではなく、新作の『いろとりどりのセカイ』も発売中です。こちらもぜひ、プレイしてみてください。

次回作のほうもすでに取りかかっています。ご期待ください。まだ気が早いかもしれませんが……（笑）。今後とも応援よろしくお願いいたします！

挿絵 司田カズヒロ

わーい待望の親世代話ですよ！その後の天クルメンバーや未来の天クルも交えてなんと贅沢な短編。ていうか未来と伊麻が同居ってどういうことですか！？

まさかあんな事やこんな事になってたり……よろしくおねがいします、なかひろ先生つ（土下座）

それにしても色々あつて作業時間が取れなかったのが心残りです。自業自得なんです（泣）

鈴葉はきつとお姉ちゃんより大きくなってるんだろなあ……（どことは言わない）

そんなわけで一時でもお楽しみいただければ幸いです。司田カズヒロでした。

約束は時を越えて

星空のメモリア・アフターストーリー

発行日	発行	執筆	挿絵	編集	印刷
二〇一一年八月十四日 初版発行	スタジオ・ファールボ	なかひろ	司田カズヒロ	井村屋あゆか・水間ホシひと	サンライズパブリケーション株式会社

連絡先

HP:<http://studiofavo.web.fc2.com/>
Mail:info@favo-soft.jp



SF文庫
スタジオ・ファーボ